

真如苑の接心修行と信者の世界観変容について

長谷, 千代子
九州大学大学院文学研究科

<https://hdl.handle.net/2324/18965>

出版情報：西日本の新宗教運動の比較研究. 2, pp. 7-31, 1995-04. 九州大学比較宗教学研究室
バージョン：
権利関係：



坂井信生・竹沢尚一郎 編

西日本の新宗教運動の比較研究2

九州大学文学部比較宗教学研究室

真如苑の接心修行と信者の世界観変容について

長谷千代子

1 はじめに

真如苑は、東京都立川市に総本部をおき、公称約75万人の信者を抱える密教系宗教集団である。各自が悟りの境涯を現世で達成するために布教活動や奉仕活動、及び「接心」と呼ばれる独特な折りの修行により「霊能者」になることをめざしている。ここでは修行次第で誰でも霊能を体得できるとされ、現在1000名ほどが霊能者になっている。

霊能者になる過程で「接心」は特に重視される修行で、真如苑の建物（＝精舎）の中で、霊能者と信者が対座した状態で行われる。霊能者は霊能によって霊界の諸霊に感应し、相手の信者の心の有り様を把握し、霊的なメッセージである「霊言」を信者に伝える。霊能には、下から「大乘」「歓喜」「大歓喜」という霊的なランク（霊位）があり、最も高い段階に達した人が「霊能者」と呼ばれ、他の信者相手に接心が行える。各霊位は「会座」という霊位認定のための特別な接心において、深い信仰が認められた場合に与えられる。

これまでの研究は、「接心」を「個人の潜在能力を解放するためのプロセスを明確に表現したもの[＊]」あるいは「人間存在の苦難からの脱却のメソッド^{＊＊}」と説明する。また、ひろたは『ルポルタージュ真如苑』の中で「霊能者が信者の悩みを聞きながら信仰に基づいたアドヴァイスを与えるカウンセリングの機能を持つ^{＊＊}」と述べている。これらの研究はそれなりに「接心」の一面をついていていると思われるが、筆者はもう少し異なる印象を受けた。つまり信者たちは真如苑の修行の中で精神的に深い変化を経験しており、それはなんらかの特殊技能を身につける「プロセス」や「メソッド」、あるいはカウンセリングというイメージでは捉えられないものだと思われるのである。

信者が霊能獲得を目的に入信するのであれば、そのプロセスが明確であることは確かに魅力的かもしれない。しかし後述のように、彼らの多くは人間

関係のもつれや病氣といった具体的な悩みを解決するために入信するのである。その彼らが現在では霊能者になることを目標にしているということは、修行過程でその価値観や世界観が変化したことを示唆していると思われる。また個々の体験としての接心にはカウンセリングの要素もあるが、霊能者と信者の関係は、いつまでもカウンセラーとクライアントの関係にとどまるものではない。信者のほとんどがその二者対面の構図を超えて、自ら霊能者になろうと考え始めるのである。

このように真如苑の修行には、もっと根本的でダイナミックな変化をもたらす作用があるように思われる。霊位向上に価値を見いだすような世界観の変化が促されていると予想されるのである。その意味では、具体的・即物的なご利益信仰から「抽象的でもはやご利益とは表現しにくいもの²⁴」への、信者の目的の変化を指摘する秋庭の報告に同感であり、ここではこの点によりはっきり光を当てたいと思う。

そこでこの報告書では、信者の世界観が修行の過程でいかに変化するのかという点について、説明を試みたい。

ここでは特に入信から会座に座るようになるまでの、入信者の初期の経験に注目する。これは信者がはじめて真如苑に関する多くの情報に接する時期である。入信者は非真如苑的な世界観をまだ保持していて、そのため驚きや疑問を多く感じるようになる。従ってある程度霊能者になる意志を持って会座に座っている時期を分析するよりも、大きな変化が観察できると期待される。また、会座や接心に最初から注目するのではなく、他の修行や教義との関係性を視野に入れるようにしたい。接心は決して自立的なシステムではなく、真如苑における総合的な体験の一つとして重要な意味を持つものである。接心の特徴を捉えることが本稿の一つの大きな目標だが、それも真如苑の包括的なイメージの中での考察を心がけたい。

この課題に取り組む上で、W.イーザーの読書の受容理論がヒントになる。受容理論は、ある読者が自分とは異なる世界観を表現しているテキストを理解する過程を、読者とテキストの相互関係としてとらえる。これを真如苑のケースに当てはめると、入信者が読者に、真如苑に関する記号の総体がテキストに該当する。これによって接心も会座も他の記号同様にテキストの一部として分析することができ、全体との関連でその特徴が押さえられる。また入信者が読者—テキストの対立関係を超えて「信者」になる地点をも明らかにできるだろう。

以下の章ではまず真如苑の概略について報告する。ついで課題の所在とイ

ーザーの受容理論を検討し、それに基づいて分析を行いたい。

なお、今回の報告書は、昨年の夏と、今年の8月から12月にかけて主に九州本部に通った筆者の体験、そして403人から回答をいただいたアンケート（8月27・28日九州本部で実施）、12人の、青年部を対象にした小規模なアンケート（12月2日九州本部で実施）、青年部の人たち（18才～25才）とのインタビュー、そのほか教団刊行物などの資料をもとにまとめたものである。

2 真如苑のあらまし

a. 教団史

教主伊藤真乗（1906～1990）は立川の飛行機製作会社に勤める技術者だったが、易や仏教に造詣が深かった。妻友司（摂受院：1912～1973）も祖母が除霊を行うなど霊的能力を持った家系の出であった。二人は1936（昭和11年）から本格的な宗教活動をはじめた。しかし同年6月に長男智文（教導院：1934～1936）が3才で他界し、第二次世界大戦中には活動の規制を受け、昭和25年には法難事件**が起これ、1952年には次男友一（真導院：1937～1952）が他界するなど苦しい時期が続いた。しかし1951年に名を真如苑と改めたころから、教えの基礎が固まり、宗教法人の認証も受けて現在の形態が整ってくる。1973年頃から信者数が急激に伸びはじめ、海外布教にも乗り出している。教主の死後は三女と四女がそれぞれ継主、雍主としてあとを嗣いでいる。

b. 教義

教団発行の案内書『真如苑とは』によれば、真如苑の目標は各人が悟りの境涯を現世で達成することである**。それを実現できるという救いの根拠は、釈迦が最後に説いたとされる大般涅槃經^{だいぱんねはんきやう}である。大般涅槃經は仏の不滅常住とすべてのものの成仏の可能性を説いており、教主はこの經典において一切の功德が成就されるとしている。教主はこの經典を教えの拠り所とし、その救いにあずかるための修行である霊能開発の手順、つまり接心の形態を摂受院とともに整えた。さらに早世した二人の息子たちは信者たちの修行の苦しみを身代わりになって受けるという「抜苦代受」の力を霊界において発揮し、接心その他の修行がうまく行くように見守っているという。

教主自ら執筆した『一如の道』にはさらに詳しく教義や苑史について述べられている。信者は全部読むことが望ましいとされているが、「教書から入

ってもいいし、接心から入ってもいい」(広報部談)というように、最初の段階で『一如の道』を読むことは必ずしも絶対的な条件ではないようである。教学について頭で理解するより、実践を重視するという姿勢の表れであろう。

c. 実践

・三つの歩み

真如苑は日常的な実践＝修行を「三つの歩み」として要約している。一つは「歓喜」、つまりお布施である。「ご奉仕」は教えにのっとった社会的活動の意味で、早朝の道路掃除や帰苑者のための交通整理などである。広義に解釈すれば、おいしい料理を作って家族に食べさせる、トイレ掃除をする、など自らに課する仕事もこれに含まれる。「お救け」はいわゆる布教で、ある人に対面で教えを伝え、真如苑に入る手助けをすることをいう。お救けされた人はお救けした人(導き親)の「所属」となり、マナーや教えについて一対一で細かい指導を受ける。

・接心

最も特徴的な修行としてあげられるのは前述のとおり「接心」である。霊能者が霊界の力を借りて信者の心のありのままを見、霊言を伝える。霊能者はこのとき霊に感応しているが霊動などは起こらず、終始冷静である。一人当たりの所要時間は2～3分である。このようにスムーズに接心が行われるのは、霊界にいる両童子(教導院と真導院)による「抜苦代受」の働きのおかげとされている。接心の様子と抜苦代受の力については分析の項で詳述する。

はじめて接心を受けるまでにはいくつかの条件がある。つまり初信者懇談会に参加すること、5回以上帰苑する(＝苑を訪れる)こと、「歓喜」あるいは「ご奉仕」を一度は経験すること、「一如祈念」という読経と祈りの儀式に参加すること、などである。教団のなかで明文化された取り決めがあるわけではないが、慣習として導き親はこうした条件を入信者に課している。その後やっと向上接心という初歩的な接心が受けられる。向上接心では3回目まで導き親が付き添うことになっている。これは、経験の浅い信者だと霊言を受けとめることが難しいからだとされている。4回目以降はその必要はなくなり、「相談接心」や「鑑定接心」など個人的な悩みを相談できる接心も受けられるようになる。

・会座

実践がある程度軌道に乗ると、導き親は会座に座ることを勧める。信者が集まって祈りを深め、霊能者の助けを借りて自らの心の状態を知り、さらな

る精進につなげていくという点では、会座は日常的な接心と変わらない。しかし会座で折りの深さを霊的に認められれば霊位を相承することができる。霊位は大乗、歓喜、大歓喜、霊能者とあって、大乗会座に座って大乗を相承し、歓喜会座に座って歓喜を相承し、というふうに一段階ずつ上がっていく。この間も、霊位とは直接関係のない普通の接心も最低月に1回は受け、三つの歩みも実践し続けなければ、より上位の会座への参座資格が得られない。こうして霊能者になると、約半年の訓練期間を経て、一般信徒の接心をとることが可能になる。

霊能者になっても一般信徒同様、月最低1回の接心は必須である。さらに霊能者同士が互いに接心を取り合って霊能の鏡を曇らせないようにするという「苑内接心」の修行も行わなければならない。また霊能者になるまでに多くの所属を抱えるため、家庭集会を開いたり、^経と呼ばれる信者グループの長になったりと、霊能者の毎日は多忙である。

d. その他

立川の総本部は真如苑発祥の地とされ、親苑と称される。霊位を相承することができる相承会座は基本的にここでしか開かれられないという聖地である*。東京、大阪、福岡など9カ所に本部があり、福井、金沢、長野など国内に12カ所、海外にもイタリア、フランス、カリフォルニアなどに支部がある。本部支部から遠い地域には小規模の布教所が各地に点在している。筆者が通った九州本部は1982年に福岡市東区に建設された。

信者組織としては、布教の際の個人的な縦のつながりによる^{経親}制度と、地域的な横のつながりである「青年部」「壮年部」などの「部」の制度がある。経は導き親一所属の「親子」関係を基本とする縦割りの信者グループで、約100世帯の所属を抱えると「経親」として経を開くことができる。集団でのご奉仕や集会は「部」よりも経を基本単位することが多く、重要な組織形態であるといえる。霊能開発の程度に応じた霊位のランク分けもあるが、これは組織的な面ではほとんど重視されていない。

3 信者の世界観の変化

ここでは信者の世界観の変容の過程という本稿の課題について、具体的に跡づけてみよう。

筆者が今回行ったアンケートは、回答者集団がほとんど大乗以上で、霊能者が6%（全体では1%弱）も含まれるという中堅以上のサンプル（403人）が中心となった。この中で入信のきっかけとして多かったのは病気や家庭の人間関係のもつれであり、「なんとなく」や「信者の人柄にひかれて」などの消極的な入信動機も目立つ。これに対して真如苑に求めるものとして「自己の向上」をあげる人が30%に上り、健康（6%）や幸福な家庭生活（14%）を上回っている。しかも、現在霊能者をめざしていると答えた信者は94%だが、入信当初には霊能者になろうと思っていなかったという人が90%を越えた。

Q34 あなたが真如苑に入信したきっかけはなんですか。一つだけお選びください。

- 自分や家族の病気 103人（26%）
- 人間関係に悩んで 56人（14%）
- 家族が信者であったから 49人（12%）
- 真理を求めて 33人（8%）
- 教師や信者の方の人間性にひかれて 31人（8%）
- なんとなく 33人（8%）

Q35 あなたがあなたの宗教に求めるものはなんですか。一つだけお選びください。

- 自己の向上 122人（30%）
- 心の平安 64人（16%）
- 世界平和 62人（15%）
- 幸福な家庭生活 55人（14%）
- 真理の獲得 34人（8%）
- 健康 24人（6%）
- 来世での幸福 18人（4%）

Q44 自分も霊能者になりたいと思いますか。

- すでになっている 23人（6%）
- 強く思う 299人（75%）
- できればなりたと思う 76人（19%）
- それほどなりたと思わない 1人（0%）
- なりたと思わない 0人（0%）

Q45 入信するとき、霊能者になろうという意志を持っていましたか。

- 持っていた 38人（10%）
- 持っていなかった 362人（91%）

彼らの「変化」は「霊能」に関する価値観や評価において顕著に表れてい

る。彼らはなぜ霊能者をめざすのだろうか。霊能者になるのはそれほど魅力的なことだろうか。

外部から見る限り、霊位を相承するにはかなり苦勞する。たとえば、会座にのぞむ前に提出する「精進報告書」には、過去1年間の実践の必須条件として「お救け」をすること、毎月1回以上接心を受けること、毎月「歡喜」をすること、「ご奉仕」に年間10回以上取り組むこと、毎月1回以上会合行事に参加することなどがあげられている。さらに地域社会的な活動をしたか、青年部などの役員を経験したか、などの記入欄がある。資格が認められたら各支部で行われている大乘会座の初座（準備段階の会座）に5回立ち会い、それからやっと東京の総本部で行われる本会座にのぞむことができる。しかし本会座に座れたからといって必ず霊位がもらえるわけではなく、人によっては数十回トライすることもある。こうして霊能者になまでに最近では16年以上の歳月を要するという²²。また、霊能が身についたのは単なる自力ではなくて教主のおかげであり、精舎以外で入神することは禁じられている。

さらに言えば、接心と会座は一応別のシステムになっていて、接心修行だけして、会座には座らないということは可能だし、現に10年近く信者をやっていながら、まだ大乘会座に座ったことがないという人もいる。

これではよほど奇跡的な体験をした人でなければ真剣に修行する気になれないだろうと筆者は考えるが、意外にも特に大きな不幸を体験したわけでもない若い信者たちが真如苑に通ううちに霊能者をめざして修行に励むようになっていくのである。

これらのことから、世界観の変化の問題は、霊能という特殊な概念の受け入れや価値付けがどのように行われるかという問いにしぼることができるだろう。

4 読書の受容理論

霊能概念が信者にいかに受け入れられるかという問題に入る前に、W.イーザーの受容理論を説明しておきたい。イーザーは『行為としての読書』のなかで、読書の過程とはテキスト構造とそれに対する読者の反応の相互作用のことであり、その相互作用の結果としてテキストの意味が生み出されるととらえている²³。

読者がテキスト構造を読みとろうとするとき、大きな役割を果たすのはテ

クストのストラテジーである。ストラテジーとは、テキスト構造が読みとられる条件を作り出し、読者による意味構成を可能にするテキストのテクニックと考えられる。

重要なストラテジーとして、イーターは「空所」と「否定」を挙げる。空所は読者を理解行為へと導くもので、例として一見とるに足らない場面で語られぬままにされたこと、会話の中での飛躍¹¹⁾などが挙げられており、読者が、「語られてはいないがこのようになったはずだ」と想像してしまうような部分のことである。一方の「否定」は読者にとって既知の確定的なことを思い起こさせ、しかもそれを打ち消すようにする働きを持つ。このとき読者は自分が当然のように受け入れていた前提条件を否定され、他の前提条件の可能性について考えさせられる。そしてテキストが用意している新しい前提条件を使って読書を試みるのである。つまりテキスト上の「空所」が、テキストについて読者の想像を誘うストラテジーであるのに対して、「否定」は読者の中に空白を作り出し、読者自身について考えさせるストラテジーである。このような相互作用を経て、読者はテキストにまつわる意味を作り出す。言い換えれば、テキストは読書という相互作用を経て、読者にとって意味を持つ「作品」となる¹²⁾。

イーター自身は「作品」形成に関わる読者の位置を重視し、読みの自由を強調するがそれによって解釈の統一性が失われることを恐れるあまり、イーターはテキストにあまりに多くの条件をつけてしまっている。テキストに最初から、読みとられるべき構造と読み方を示唆するストラテジーが仕組まれているならば、事実上読者の自由はないに等しい。しかし「読書の現象学」の章では、イーターはコミュニケーションモデルを使って、異なる世界観をもつテキストと読者の間の相互作用について考察している。この点には参考になる部分があるように思われるので、筆者なりに解釈してモデルを取り出してみたいと思う。

まずこの章では、前述したストラテジーとしての空所とは違う意味で「空白」という概念が現れている。

人間が相互に見ることのできないもの、それが対人関係の構成基盤をなしている。この基盤をレイニングは、「空白 no-thing」と呼ぶ。…すなわち対人関係は、このようにわれわれの経験の中核にある空所を絶えず補填することで成り立っている。¹³⁾

ここでいう空白は、解釈コードの空白と考えることができる。例えばこの

世の幸福は人間の努力次第であると考える人と、神様のおかげだと思っている人が対話すると、日本語などの共通した解釈コードがある一方で、共有されていない解釈コードの存在を双方とも感じる。これを対人関係から読者—テキスト関係に置き換えると、読者にとっては、自分にはないテキストの解釈コードが「空白」として感じられると想定できる。

ここでいわれる空白は、テキストの世界観と読者の世界観が両立しない部分に生じる、読者の世界観の中の空白であると言い換えることもできる。この空白を埋めようという動機がコミュニケーション——読書の場合は解釈——を誘うのである。そしてこの空白はストラテジーとして扱われた「否定」と通じる点があるように思われる。さっきはテキストの意図的な戦術としての否定が読者のなかに空所を生み出すとされていたが、テキストにそのような意図がなくても、テキストと読者が共通した解釈コードを持たない場合は、意図と関係なく空白が生じたりする場合もあるように思う。例えば真如苑では精舎の中に入ると「お帰りなさいませ」と奉仕の人から声をかけられる。これは真如苑の人にとっては普通のことだが、外部の人間にとっては、常識を否定する「ストラテジー」として聞こえるのである。

こうしてテキストと読者の間でコミュニケーションが始まる。

空白が読者自身の投影で完全に補填されるのは、相互作用の不成立を意味する。空白があればこそ読者に投影の態度を起こさせるのであるし、テキスト自体に変化が生じるわけではないので、テキストと読者との関係が成立するのは、読者の側の投影に変化が起きる場合をおいてない。^{*13}

他者の思考を自分のものとする限り、読者は一時的に自分自身の行動様式と疎隔している。読者の関心は、自分の経験史の地平にはなかったものに向けられている。いわば、読書中にはわれわれの人格に人為的な分裂が起きており、自分ではない自分が全面にたてられる。^{*14}

つまり読者とテキストの相互作用は、読者が自らの考え方を離れて他者の思考を獲得しようとするときに起こるということであろう。もっとも自分の思考様式からすっかり離れられるとは考えにくいので、他者と自分との間で両立しない解釈コードについて、あえて他者の解釈コードを採用しようとすることであると言い換えた方がいいかもしれない。

なお、イーターは、読者が変身したような感じを持つのは、他者の考え方によってつかの間に別の人生を過ごす経験をしたからであるというヘンリー

・ジェイムズの言葉を引用している¹¹⁾。「つかの間」であるのは他者の思考(=解釈コード)が必ずしも自分のものになるとは限らないからである。

ただし、テキストから得られる未知の経験と自己の経験の蓄積とを融合しようという自発性¹²⁾が評価、実践行動、決断に現れたとき、読者は他者の解釈コードを自己のものにすることになる。このような場合には同時に意識自体の再構成¹³⁾が行われるとイーザーは述べる。

ここで注意しておきたいのは、イーザーが理論化の対象にするのは「文学作品」の読書過程であるということだ。これに対して筆者が研究対象にしているのはある宗教集団への入信の過程である。この二者の違いははっきりさせておかねばならない。

文学作品を読む場合、自己意識の再構成が起きるかどうかはひとえに読者の感受性にかかっており、変革のインパクトも比較的弱いように思われる。というよりむしろ、私たちは強く自己意識の再構成を迫るテキストを「宗教的」だと感じ、「文学的」テキストから区別しているのではないだろうか。したがってその人が「入信」という「自己意識の再構成」の意志を持ってのぞむ宗教団体のテキストには宗教的メッセージが含まれている。なにが「宗教的」なのかをまるごと指摘はできかねるが、通常の文学作品との対比で考える限り、「正しい」自己意識の規定を読者に与える側面を必要条件としてあげることができるだろう。つまり、「自分」は誰なのか、どういう存在なのかを相手に対して教えるようなメッセージを含むことが予想される。

また、入信過程そのものに、意識の再構成を促すつよい働きかけがあることも予想される。宗教集団は単なる本ではなく、生身の人間の集まりである。彼らは解釈コードの獲得と、意識の再構成を何らかのやり方で促しているはずだからである。以上の二点において入信過程が読書の受容過程から乖離してその特徴をあらわにすることが予想される。

なお、教団からの働きかけは読者側の解釈行為の中に溶解されているが、信者同士のレベルでは双方向的なコミュニケーションが起きていることは確かである。権威的なテキストとある程度批判可能な形で語られるテキストとでは読者の解釈過程も違ってくると考えられるので、語り手の違いによって真如苑内のテキストを分類する必要があるだろう。ただしそれを考慮しても、入信過程においてはやはりその教団で「正しい」とされる情報は教団から入信者へと流れているのであり、分析に際しては一方的な情報伝達として入信過程を捉えることができると考える。

5 分析

真如苑の成員と入信したばかりの「初信者」の間には、当初共有されていない解釈コードがあると想定される。端的に言って教団用語や実践の意味を、初信者は最初うまく解釈することができない。しかしやがて真如苑を価値のあるテキストと見なし、それを読むことによって解釈コードを獲得し、成員となっていく。具体的には「一如の道」を読んだり、奉仕活動の実践をしたりといったことが、この真如苑というテキストを「読む」過程に当たるだろう。

教義・実践の総体としての真如苑をそのままテキストとして取り扱うのは不可能なので、教団内の真如苑に関する「言述」に分析対象を絞った。これは、真如苑には霊能概念を説明する独特な教団用語が多く、霊言というユニークな形態の言述もあるので、真如苑の特徴を浮き彫りにするには、言語に注目するのがもっとも効率的と思われたからである。また行為は必ず言葉で解釈されるという意味では、言述はもっとも網羅的な分析対象であるといえるだろう。

以下の分析では、まず言述との接触形式、つまり語り手との関係について整理する。次にそれぞれの言述の内容とその「読み」の過程について分析する。最後に入信者の中に真如苑の世界観が定着し、読者—テキスト関係を離れて「信者」となる仕組みについて考察する。最終的には読書過程との対比をとおして「入信する」とはどういうことかを明らかにしたい。

なお、教団では入信してから3回接心を受けるまでの間の信者を「初信者」と呼びならわしているが、ここでは初信者も含めて会座に座るようになるまでの信者の呼称を「入信者」に統一しておく。

a. テキストはどのように提供されるのか——語り手

読者の受容態度はテキストの提示のされ方によって変わってくることが考えられる。そこで、真如苑のテキストを語り手によって整理しておこう。

入信者の立場からいうと、まずもっとも身近に導き親や経親といった先輩格の信者がいる。もともと親しかった人が多く、真如苑について気軽に話し合える。次に両常慧（継主・雍主）を含めて、教師としての性格をより強く持つ教団関係者がいる。両常慧はある意味で信仰対象に近い性格を持っており、教団役員は信者ではあっても入信者から見れば信者仲間とは呼びにくい。

さらに、「霊界」の存在を仮説的に設定しておくことができる。なぜなら、後で詳述するが真如苑では接心を通じて霊的な言葉——霊言——を聞けるからである。「霊界」は接心という特別な時空を通して、かなり特権的な形で入信者にテキストを与えている。したがって入信者に対する第三の語り手として「霊界」をあげておくことは重要である。

以上の人々の関係について入信者を中心に対話のパターンを考えるとこのようになる。

- A. 教団関係者→入信者
- B. 入信者→教団関係者
- C. 霊界→入信者
- D. 入信者→霊界
- E. 先輩格の信者→入信者
- F. 入信者→先輩格の信者

このうちBとDは少ないので除外する。またEとFはコミュニケーション的な状況と捉えられないこともないが、一方が入信者であるため、真如苑のテキストの流れとして考えれば、Fは除外してもかまわないと思う。従って分析の対象となるのは以下の三つのテキスト提供パターンである。

- | | |
|-------------|-----------------------|
| ①教団関係者→入信者 | 親教・瑞教・『一如の道』・法幢・教団刊行物 |
| ②霊界→入信者 | 霊言（向上接心・会座） |
| ③先輩格の信者→入信者 | 体験談 |

b. 何が伝えられるのか——内容の検討

- ①教団関係者→入信者 （親教・瑞教・『一如の道』／法幢・教団刊行物）

この場面で受け渡されるのは、ある程度権威的なテキストである。親教とは教主が生前行った講話、瑞教とは阿常慧が行う講話のことで、非常にありがたなお話とされている。このほかのテキスト類も、入信者にとって信頼のおける資料であり、真如苑に関する重要な言葉はほとんどこれらによって公式に与えられる。悠音精舎¹¹の落慶の際に行われた座談会で、継主が「真如霊界」について語っている部分を例としてあげてみよう。

真如霊界が尊いのは、仏教でいうところの地獄や餓鬼の世界、そうしたところにも通じて、霊能を通して接心者に教えてあげることができるのです。仏教の教理を正しく理解できるのも、真如霊界が仏界から地獄界まで一切を包含しているとこ

ろにあると言えます。そして、それは現世の人々の、地獄からみ仏にいたるまでの心の状態にもつながっているとの顕幽一如の理を思えば、人間の心も全部、真如霊界は分かっている。そうした霊界の頂点にあるのが真如双親さまがおられる大字の創源ではないかと。でもそれは今、結論づけることではありませんね。時とともに徐々に分らせていただくことでしょう。¹¹

このテキストから、筆者とは異なる世界観が読みとれる。それは簡単に言うと、「実は現世のほかに真如霊界が存在していて、現世と霊界には何らかのつながりがあって、霊能を通して現世の人々にもその存在が感じられる」というものである。

現世／顕幽一如／真如霊界
霊能 大字の創源

この三分法は筆者が真如苑で使われている難しい単語を整理するのに役立った。例えば以下のようにである。

教主一家に関する言葉

「両常慧」（「継主」「雍主」）	現世の苑主
「両童子」（「真導院」「教導院」）	抜苦代受を行う媒介者
「双親」（「摂受院」「教主」）	真如霊界の創造主・住者

修行に関する言葉

「りぶらい」「世間法」	意味を読み解くべき現象・ 現世的な常識
「抜苦代受」「お力」「三つの歩み」	読み解く方法・霊的な助力
「喜び」「如来法」	読み解かれた現象・霊的な正法

接心に関する言葉

「接心者」	接心を受ける（べき）人
「ミーディアム」「霊能者」	仲介者
「諸霊」	応答者

この三分法を印象づけるのは（これを無意識のストラテジーと呼んでもいいかもしれないが）、現世と霊界との媒介項を規定するために集中している多くの重要な概念である。例えば、心の中に歓喜世界（人々が喜びにあふれて暮らす理想世界）が打ち立てられたという時の心境を表す言葉に、「常楽我浄」（理想世界の有り様）「顕幽一如」（現世界と霊界が表裏一体になっていること）などがあり、「歓喜世界」という表現も、「心の中に開かれた

歓喜世界」という形で出てくることが多い。「抜苦代受」は修行の苦しみを軽くし、接心修行を現在の洗練された形式に導いた重要な概念である。両童子が夭折したのは信者の苦しみを抜いて軽くし、代わって両童子が受け、信者たちが修行しやすいようにするためだと説明される。そもそも「接心」という修行形式そのものが、霊界と現世を結ぶものとして非常に重視されており、「向上接心」「向上相談接心」「相談接心」「鑑定接心」「会座」「大乘」「歓喜」「大歓喜」「霊能者」など多くの教団用語にとりまかれている。

これと対照的に、真如霊界について費やされる言葉は少ない。前述の「真如霊界」「大字の創源」のほかには、教団映画の中で白馬にまたがった真導院が草原（大字の創源）を駆ける場面が出るぐらいで、死者の霊や天部の神々や稲荷や双親が霊界の中でどのような位置を占めるのか、系統だった説明は行われていない。ある信者は広大な霊界の中に教主が真如霊界を開拓したのではないかというイメージを語ってくれたが、前述の継主の話では、真如霊界は仏界から地獄界までいっさいを包含していることになっている。だが継主自身、今結論することはできないと言うように、真如霊界ははかりしれず、図式や言葉では表現できないということである（広報部談）。

この教団関係者から与えられるテキストについて、以下のような点が指摘される。

真如苑の世界観を共有していない入信者にとって特に目立つ「空白」として現れるのは、「真如霊界が存在する」という点（＝真如霊界の空白）と「現世にしながら真如霊界と接触できる」（＝霊能・抜苦代受といった霊的力の空白）という点である。このうち「霊的力の空白」には難解な教団用語の山という手がかりが残されており、導き親に「上求菩提」（信仰歴の長い人に教えについて尋ねること）することで埋められる見通しが立つ。一方「真如霊界の空白」には、今のところ手がかりらしい手がかりは与えられていない。

②霊界→入信者（抜苦代受・向上接心）

ここでは入信者が、手がかりのある「霊的力の空白」を埋めようとする場面を考えてみよう。しつこく聞き出すことで教団用語の意味が分かる見通しが立つと書いたばかりだが、実はそれでも空白は埋められない。むしろ導き親、経親は丁寧に教える努力はするけれども、それも必ず実践を通してなのであり、理屈によってではないからである。

霊能についてはよく分からなかったのでどんなものだろうと思っていました。導き親さんは何回も受けたら分かるから、とおっしゃって…

(インタビュー-A: 1994. 9. 18)

最初の接心では抽象的で厳しいことをいわれました。抽象的だったのでこんなものかな?と。でもあらかじめ経親さんから接心は10回受けてみなさい、1回じゃ分からないよ、と言われていたから、受け続けようというはらは決まっていた。

(インタビュー-B: 1994. 9. 18)

入信者は家族、親類、友人などから勧誘された人がほとんどで、入信者—導き親の関係は当初から比較的親密で信頼関係は最初からあることが多い。入信者が素直に(理屈がよく分からないままに)実践にはいることは十分にあり得る。こうして入信者は早起きして掃除をしたり、「歓喜」をおこなったり、朝夕の読経を始めたり、接心に座ったりするようになるが、その実践の中に非常に特異なテキストが現れる。接心のとき、霊能者を通して語られる「霊言」である。

接心では、接心者(接心を受ける人)は数十名の他の信者と一緒に精舎の広間で円陣をくんで祈りを深める。接心は各本部で月に十数回行われ、当日には多いときで2~3時間順番待ちをする人もいる。一つの円陣の中に数人の霊能者がいて、祈りの深まった接心者の所へ行って接心をとる。信者にとって霊言は個人的に与えられる尊いメッセージなので、メモして大切に保存している人も多い。

信者は接心で何を言われるのだろうか。青年部の集会(1994.12.2)に来ていた信者39人に「向上接心のとき自分が特に言われることの多い霊言を3~5つほどあげてください」「いただいたご霊言の中で特に印象深いものがあればそれについて書いてください」という主旨のアンケートを採ったところ、100あまりの霊言のサンプルが集まった。

決まり文句として目立ったのは、「霊位向上が示されますよ」「感謝ですよ」という言い方で、それぞれ20例以上あった。また、「お救いはしていますか」「足元から取り組んでいってください」「お教書を読んでください」といった具体的な修行上のアドバイスと、「男ならいさぎよく」「教主さまを信じて取り組んでください」などの心構えのようなアドバイスが、それぞれ20例以上あった。残りの40例のうち36例は先祖霊や信者自身の性格や考え方に關することであった。筆者が注目するのはこの36例である。

あなたの心の中の、深い森の大きな湖に水滴が落とされ、それが広がっていく状態が示されます。

あなたが水たまりに釣り糸をたらしめている姿が見えます。何のことか分かりますか。ふつう釣りをするときには川や海の魚のいるところなのですが、魚のいないところで釣り糸をたらしめているのです。他の人のことを気にするのではなく、大切なことに目を向け、正しいことは正しいと言うべきですよ。

真如苑では霊能はしばしば鏡に例えられる。ミーディアムはこのように接心者の心を映し出す。ある霊能者の話によれば、ときには接心者の祈りが浅くてどうしても相手の心が見えてこないことがあるという。そういうときは、アドヴァイス的なことを言うにとどまるらしい。この説明から、接心本来のあり方はこのように接心者の心を映し出して描写することであるといえる。

これらの例は非常に印象的なイメージを持った言葉だが、このように信者が一人で出てくるのは、サンプルの中では以上の二つだけである。

あなたのご先祖に一生懸命他の宗教をされた方がいます。その方の持っているものを受け継いでいます。だからもっともっと折れるはずですよ。

あなたの手を教主さま、真導院さまが引いてくださっていますよ。

お腹の病気でなくなった主系の祖母が示されて参ります。いつでもそばで見守っていらっしやいますよ。

このように、接心者は教主一家や自分の先祖といった人々との関係のイメージの中に映し出されるのである。

接心で霊言を受けるという体験には、真如苑を理解しようとしている信者にとって二つの大きな意味を持っているように思われる。

一つはテキスト①の具体化の体験としての意味である。テキスト①では、「霊的力の空白」についての難解な言葉が手がかりとして与えられていた。それらの言葉の指示物は入信者には全く経験がなかったので、いくら言葉があってもそれを自分の経験に照らし合わせながらの具体化はできなかった。しかし接心を受けた段階で、信者はこのような儀式を接心といい、目の前の人が霊能者で、ミーディアムとしての役割を果たし、霊的な言葉を話しているのだということを体験したことになる。空白を読み、具体化するための「自分の」経験を手に入れたのである。接心に限らず、「歓喜」「お救け」

「ご奉仕」などの言葉についても同様に、真如苑の世界観に裏打ちされた実践の中で、具体化が進むことになる。

もう一つは、霊言という非常に権威的で希有なテキストの受容としての意味である。テキスト①までは、信者はある程度読者＝傍観者でいられた。親戚に勧められて断りきれずしぶしぶ拝読し、真如苑というテキストを眺めているだけでかまわなかった。しかし接心を受けたとき、相手の心を鏡に映すその特異な性質によって、眺めていたつもりのテキストの中に自分自身が登場する。霊言の中で、自分は教主に手を引かれていたり、死んだ祖母に見守られたりしているのである。自分が出てくるテキストを読むということは、「自分」にとって何を意味するのだろうか。

自分の知らない自分をテキストによって示されたということは、「自分」という概念の中に新たな「空白」が認識されたということである。現世と真如霊界がつながりを持つという真如苑の解釈コードが「自分」に適用されるとき、古い（現世的な）自己概念は意味をなさなくなる。こうして入信者は真如苑ばかりでなく「自分」をも読みなおし始める。

③先輩格の信者→入信者 （体験談）

最後に、導き親、経親をはじめとする先輩信者という語り手と、そのテキストについて考えてみたい。分析の都合から導き親が最後に登場することになったが、実際には彼らは入信時から影響を与え続けている。彼らは真如苑を紹介し、マナーを教え、教主や教書について説明する。わかりにくい霊言について解釈をそえることもある。しかしすべてを説明に頼らず、接心をはじめとする実践を促す。普段から話し相手になり、頃合を見て会座に座ることを勧める。このように先輩信者はつねに入信者に寄り添って真如苑の読み方を指導し、入信者の古い「自分」概念を捨てさせるのに一役買っていたとも言える。なかでも入信者にとって信仰の上で参考になるのは彼らの体験談であろう。

真如苑においては、月刊の『内外時報』の3分の1から半分近くが体験談で占められ、教主一家の話題を主眼とする季刊の『歓喜世界』にも4、5編は掲載される。他にも弁論大会やブルーフなどによって多くの体験談が聞こえてくる。中でも目立つのは奇跡の物語である。この奇跡の多くは抜苦代受の力によるとされており、これが真如苑のご利益であると説明されることも多い。

どの病院に行っても99パーセント、子どもは無理と言われていた私でしたが、旧

真澄寺で行われた法前供にはじめて立ち会わせていただき、すぐ子どもを授かり、そのときは感謝でいっぱいでした。ところが2人目を身ごもったことから、最初の子も偶然だったと思ってしまい、信心が薄れてゆきました。その上5カ月過ぎてもお腹の子の心音が聞こえず、医師からは、死んでいるので処置したほうがよいと言われ、み教えを疑うようになってしまったのです。姉が心配して東京から飛んできてくれ、枕元で慈教の咒を唱えながらおなかをさすってくれました。すると今まで反応のなかったおなかの子どもがぐっと動くではありませんか。それから順調に生育してゆき、無事に長男を出産することができたのです。（昭和37年入信 女性²⁰）

これだけなら抜苦代受はご利益だという説明に異存はない。しかしこのタイプの話はそれほど多くない。むしろ多いのは、つらい修行の苦勞話である。

私は新任の美術教師としてある校内暴力校に赴任した。真導院さまの忍辱行に比べたら、と必死に自分に言い聞かせ、いくら反発されてもぐっとこらえ笑顔で接した。

…卒業式の日、一人の生徒が私のところへ来た。家出したその子を探しに夜の町を走り回ったこともあった。週に3日は家庭訪問、最後には、「先生なんか私の気持ち分かっていたまるものか」と泣きじゃくりながら反発していた子が、私にこう言った。

「先生ありがとうございます。今まで反抗してごめんなさい。先生のことは忘れんけんね。」
両童子さま、これが抜苦代受なんですね。ありがとうございます。²¹

前述の女性の話にも続きがある。非常に長い話なので要約する。

この（前述の）抜苦代受により信心に目覚めていれば、その後の惨めな運命も避けることができたはずだが、私は姉の教化に猛反発。その後は交通事故、主人の事業の倒産、母の死、と因縁のどん底に落ち、やっと素直な心になることができた。姉に連れられていった接心では亡き母が示され、「よくここまですることができたね。お母さんは本当にうれしいよ」との言葉に、重い胸のつかえが軽くなるようだった。その後13歳の長男が脳腫瘍と診断され、死の宣告を受けたが、業の浄めに双親さまがくださった精進の機会と思い、家族が一丸となってお救けに奔走。腫瘍が消えるという抜苦代受のお力をいただいた。

子どもが治ると今度は私が腎臓を悪くしたが「どうせなかった命でしょ。死ぬ気でがんばりなさい」と経親に叱咤され必死で会座に参座、今までの罪を懺悔するなか大乘を相承、同時に体も直っていった。平成2年に経立てを勧められたとき、仕事を理由に渋っていた主人が足を悪くするというりぶらいをいただいたので、私は今こそ主人に経親になってもらい、しっかり支えることが自分の使命だと覚悟が定まり、平成3年に晴れて経立ての許可をいただいた。

教えに目覚めた後も、不幸は相変わらず襲ってくる。真如苑の実践も並行して行われる。経をおこす許可をもらって喜んでいるようだが、筆者の感覚では苦勞が増えたばかりでおよそご利益とは思えない。いったい抜苦代受とは何なのだろうか。教団関係者によれば、抜苦代受と単なる偶然は「センスで」見分けるといふ。結論を言えば、日常生活の出来事を、霊の力によって引き起こされたこととそうでないことにわけける明確な基準はない。信者が生産する体験談のテキストは、そのセンスを身につける手探りの努力であり、この疑問に関する彼らなりの答えだと考えられる。

僕が入信したのは3歳のとき。以来、悩み無し、苦しみ無し、反抗期も無し。両親は昔からまじめに取り組んでいる。親の土台があるから自分がある。「今まで何もなかったことが救いだったんだな。」と思う。

(大学生 男性 弁論大会 1994.8.21)

出来事が「奇跡」の名に値するほど驚異的か否かは問題ではない。今までとは異なるセンス——解釈コードを身につけることで、彼らはこれまでの日常生活そのものを奇跡として見るができるようになる。抜苦代受のお力とは奇跡やご利益ではなく、日常を異化し再解釈する力なのである。

以上のことから、信者は霊言をいただいた段階で、自分が正しいのか、それとも霊言が正しいのかという岐路に立つと想定できる。言い換えれば、読むべきものは真如苑のテキストなのか、それとも自分というテキストなのかということである。そして体験談は入信者に自分を読み直すことを促すように働くのである。

c、信者は何を理解するのか——霊劇

こうして「霊的力の空白」（霊能や抜苦代受とは何か）は、「自分」という新たな空白（今まで霊的力に気づかなかった自分とは何か）へと徐々に置換されていく。これを強く促すのは接心という鏡の作用であり、数多くの体験談である。入信者が求めていた真如苑についての読解は、自分についての読解という「宗教的な」形へと変化することになった。

ところで、もう一つの「真如霊界の空白」が手つかずのままであった。前述のとおり、真如霊界のために「正式に」費やされる言葉やテキストはほとんどない。ところが霊界が非常にリアルな印象を持って現れる機会がある。それが会座である。会座は霊位を与えられ、霊能者になるための非常に厳粛

な儀式で、今まで取材を許された研究者はいないという。広報部によると、会座は原則として親苑で一月7回ほど開かれ、一度の会座に数百名が参座する。歓喜以上の会座には両常慧も出席する。信者は2列に向き合う形に並んで座り、前方には「歓喜ミーディウム」と呼ばれる特に能力の高い霊能者が6人ほど並ぶ。全員で読経の後、歓喜ミーディウムたちが「霊劇」を行う。霊劇とは霊が歓喜ミーディウムに感應して参座者の心を映しだし、その場で会話するものである。対話のうちに信者もミーディウムも祈りを深めていく。ミーディウムが祈りの深い人に霊言を与える。そして本当に祈りの深い人であれば、霊位が開かれたことが認められる。最後に両常慧が羯磨を行い、会座は終了する。

会座は非公開だが、霊劇の問答の一部は季刊誌『歓喜世界』に「天音」と題して掲載される。まず93年9月の大歓喜会の例をみてみよう。（長いので筆者が少々略した。）

指導霊A 「…自分が教えを貰いてゆけるかどうか不安がわくんですよ。

あなたはそんなことないですか。」

指導霊B 「絶対なんて人はいないんですから、誰でも修行の途にある

と思って、足りないから少しでも浄めてゆこうと、それでいいんじゃないでしょうか。…堕ちた人々は慢心があってそうなったんですから、自信がないくらいが丁度いいんです。むしろそれを喜びに転換していくことですよ。」

指導霊C 「そう思えばいいんですがね。過去に起こったいろんな出

来事や人の姿を見せつけられると、なにかこわいなと思ってしまうんです。」

指導霊B 「自分は正しい、だから何も言われるすじ合いはないんだ、

という、これが怖いと思いますよ。自分は違っているかもしれない、だから常に、み心をいただいて修行してゆこうと、そこに取り組みがあるのですよ。」

覚醒霊 「昨、拝、さあ、そんなことは心配しなくてもいいのだと、

軽くすることも違うけれど、いたずらに恐れるばかりというのもどうでしょうか。…双親さまの道を奉じて踏み行かんとするなら、煩悩を持ちながらも、教えのために歩むことを喜びとし、深く善に進むことが大歓喜であり、転生出離ではないでしょうか。昨、覚悟を定めて真如双親さま、両童子さまを中心に据えて常慧さまにしっかりと続かせていただく。その祈りを深めていってください。」^{・22}

ここでは接心と同じように、霊が信者の心を映し出して代弁するという事になっている。しかも信者が多数であることを反映して、複数の霊言が対

話を行っている。また、接心では接心者は霊能者と一対一なのに対し、ここでは霊言を集団で共有している。接心が個人的体験であるのに対して、霊劇は一定の集団で共有する接心である。霊言を共有することで、各人が個別に抱いていた霊界のイメージも共有されたかのような錯覚が生じる。そこに具体的な霊界が顕現しているわけではないのだが、「等しく霊界から照射されるわれわれ」の体験を通して霊界のリアルな「感じ」が生まれるのである。

霊劇の中には時として両童子も現れる。以下は平成3年7月の歓喜会座での霊劇である。

教導院 「双親さまの大慈しみに生かされている自らをよく見つめたなら、自分の我を滅し、無条件でどこまでもみ心に立ち、お応えできるはずですよ。さあ“わが身を滅して”動んでいってください。」

真導院 「自分を守るのではなく、思い切って滅し、真如教主さまのお遣わしになられた、教苑100年への指針、内外時報とか教徒の体験を通して、どのようなみ心を後世に託されたのか、その真意を覚って遵法していく。そこに限りなく大きな、み仏一如の勇猛心と喜びが開くのですよ。」

…護法神は、婦人教徒の前に行き、言葉を向けた。

護法神 「自分が通ってきた道のりを振り返り、これから先どうなるのかと不安になってしまうものがありますよ。双親さまが宗教の道にたれたとき、み仏から一刻の猶予も与えられなかった。それでもみ仏を信じ、仏意のままにいっさいを賭けられて、今日の真如み教えがあるのです。あなたは教えの通りに歩めばよいのですから、確固たるレールが行く手に敷かれているではありませんか。さあしっかりと歩んでいってください。」

真導院 「教えより自分という迷いを浄め、ひたすら我が魂を教えに結んでゆくことです。

そこに固い個我の殻を破り、如来我に転生し菩薩界に生かされる道があるのです。そのときは勇猛心と喜びが、満ち潮のごとくあふれててきますよ。」

東京73部 Cさん相承。***

ここで行われていることは以下のようにまとめられるだろう。

一つ目は、新しい自己の構築作業である。日常の接心は、そのときそのときの人の心を映し、どういう行動をとればよいかをアドヴァイスするものだった。その結果、「今までどうして商売がうまく行かなかったのか」、「あのとき事故に遭わずに済んだのはなぜだったのか」という日常レベルで、信者たちは自分を読み直すようになった。つまり接心は、自分を構成する歴史的出来事の要素を揺さぶることで、自己概念のうちに虫食いのように空白を生み出す。具体的な行動の断片を異化することで徐々に（抽象的な）自分を

解体する作業だった。

これに対して会座の霊劇は、最初から抽象概念としての自己を問題にしている。「今までの自分ではダメなのだ。如来我にならなくては」という言い方で、意識的に自分を組み直すよう促している。

この接心から会座への飛躍は、「自分」というテキストの（真如苑風の）具体化の作業から、一つの総合的解釈の提出への移行に見立てることができるだろう。弁論大会の出場者に選ばれる人のほとんどが大乗以上の霊位を持っていることは、このことと無関係ではないと思われる。彼らは日頃の接心で少しずつ異化してきた自分の断片を総合し、新しい自分について体系的に体験談を語れるようになった人々なのである。その意味で、会座は主に接心によって始まった「自分」の読解に一つの解釈を与える場であると思われる。

つぎに、その新しい「自分」に対して真如霊界が認定を与えるということが指摘できる。会座で祈りが十分に深まると、（つまり新しい「自分」の自覚が芽生えたと）、その人は霊界によって霊位の認定を受ける。その人は「大乘相承者」や「大歓喜相承者」という一人の霊位相承者として認められるのである。

考えてみれば、今までの「読書過程」において、真如苑が正誤、善悪について常識以上には独自の基準を示すことはほとんどなかった。「人間の考えでこれはよい、これは悪い、と思っていても、仏さまの目から見れば逆のこともある」といった論理でばかされてきたし、「たとえ間違った気づきでも、その人が一生懸命考えた末のことであれば、それはそれでいいんです。善覚か悪覚かは仏さまが決めることですから（広報部談）」と、人間による安易な善悪の判断は回避されてきた。しかし会座では、祈りが十分深いかどうかという判定が行われる。このときは、やはり基準は明文化されないが、判定の結果ははっきりと現れる。つまり霊界の空白は力として現れる。正しさの内容は空白のまま、正しさの占める場所だけが確保されている。空白は結局埋まらないが、なにか「ある」ものとして、信者は霊界を体験する。

三つ目に、この会座が霊能者共同体への加入儀式的側面を持つことがあげられる。大乘相承者、霊能者などの集団は、真如霊界（＝空白）の力によってのみ、他の信者と区別される。霊界からの認定以外に、彼らの論理的な共通項はない。役職や献金の多寡、あるいは信仰年数は霊能とは関係ない。霊能力があるかないかの基準は、霊界から「ある」と見なされたかどうか、ということしかない。また、一度認められればよいのではなく、その後も霊能の鏡が曇らないように常に自分の心を見つめ続けなければならない。

従って彼らは霊界からの視線が届かない場所へ出ることはできない。なぜ真如苑の霊能者は分派独立しないかということがよく問題になるが、それは、真如苑を出ると霊能者ではなくなるからだ。向上接心、苑内接心、ミーディウムとしての接心と、接心に明け暮れる霊能者の生活がそれを象徴している。常に霊界によって認められている、見られている、という感覚だけが彼らを霊能者にしているのである。霊能者のほとんどが人格者であるからといって、それを基準に霊能者を選ぶのではない。霊能者集団は、なんらかの理想や基準のもとに集結したのではなく、自己の内部へと向かう（自分自身の、あるいは霊界の）視線によって囲い込まれているのである。

最後に、新しい自分を「完全に」作り上げることの不可能性を指摘しておこう。真如苑の目標は自らの心の中に歓喜世界を開くことだが、しかしこれは言葉の上で不可能とされている。なぜなら教主ほどの深い悟りにいたることはできない、というのが教団関係者の一致した見解だからである。従ってたとえ霊能を開いても、どんなにすばらしい精神状態になったと感じても、教主のように完全に「歓喜世界を開いた」ことにはならない。これに関連して「真如霊界の空白」が悟りの認定の力を独占しており、その基準を言述化することができないという点もあげられる。霊位はある理想に達したから与えられるのではなく、最低レベルはクリアした、という形で与えられる。言葉によって正しさを確認できないから、「これでよし」とは永遠に言えない。結局信者は最善の方法として、常に修行している、という状態を絶えずとり続けるのである。

会座は自己形成のためのものである。しかし、自己は完成しない。なぜなら霊界の空白は「完成」の否定だからである。こうして彼らは階梯を登り続け、自分を常に読み変える作業をおこなう。信者にとって真如苑が「日々魅力にあふれている」（伊藤・ユウ・C：1994.9.17）のはこうした理由によるのだろう。

6 まとめ

「対象」を「読む」視線を「自己」に向け、自己意識の再構成が起きるとき、読書過程は終わり、入信過程が始まる。文学作品を読むにあたっては「自分」が対象を解釈するのに対し、入信においては「自分」が解釈される。真如苑の場合は接心によってこの主客の入れ替わりが鮮やかに行われる。

もちろん、今描いたモデルは、霊界も霊能も信じていない人が真如苑の世界観を獲得する過程を理念的に表現したもので、すべての入信者が①→②→③と進んで行くわけではない。実際には『一如の道』を読むだけでピンと来る人もいるだろうし、このような世界観になじめず苑から離れていく人もいるだろう。また三つの段階は同時進行することによって、より大きな効果を発揮する。例えば自己のテキスト化の出発点である接心を「有相接心」、具体化の基礎となるあらゆる修行体験を「無相接心」というように、双方を接心として統一する呼び名があるということは、両者の誓き合いの重要性を象徴している。真如苑の場合、このようにして入信者の意識が自己の再解釈まで導かれ、信者が誕生していると思われる。一般化した言い方をすれば、自己の再解釈にいたるがどうかかふつうの読書過程と入信過程とをわける指標であると考えられよう。

なおこれまでの記述では真如苑の修行は厳しいだけという印象を与えたかもしれないが、真如霊界の空白が「完全な正解」を言葉の上で認めないことによって、読書過程においてはかなり自由な解釈が許されている。

例えば生活の指針として、真如苑には「女性は摂受院のようであれ」「女性十七訓」「若者は両童子さまのできなかつたことをしてください」などの言葉がある。しかし、この中で比較的具體性を持っているのは摂受院が女性のために説いた「女性十七訓」と、せいぜい「摂受院のように」くらいであろう。女性十七訓といっても「女であることを忘れない」などの他は特に女性に限ったことではないような内容だし、「女性十七訓を男性十七訓と読みかえて（弁論大会：1994.8.21）」ががんばるという男性もいる。若者のモットーともいえるべき「両童子にできなかつたことを…」では、考えを縛るような部分はほとんどない。両童子は3才と12才という若さで亡くなっており、大学に行くことも、ピアノを弾くことも、なんでも該当してしまう。インタビューの中で「思いっきり遊ぶこと」を挙げた人もいたが、傍らにいた関係者がとがめるようなことはなかった。人間による安易な善悪の判断は避け、その人が一生懸命考えて出した答えを尊重しようということなのである。

接心は傍観者の視線さえ反転し、自己反省・変革を促す巧妙な装置である。接心を受けることによって、客観的な視線で捉えた「霊的力の空白」は「自己の空白」へとすり変わっていく。「真如霊界の空白」は言葉を拒否することで信者たちの解釈の自由を保証する。内化された視線はそのまま霊界の視線として無言のうちに自由を制限し、解釈及び集団としての無秩序を回避する。信者たちはそれぞれに自らの努力で道を切り開いているようだが、それ

を可能にするのは霊界及び教主の無言の力によるものであり、真如苑の信仰の基底部には強い教祖崇拜があるとみてよいだろう。教主や抜苦代受の力がリスクの少ない自由を保証し、恐れることなく自己意識の解体と再編へと、信者たちを向かわせているのである。

⁹¹石井研士「世俗社会における仏教の可能性」(『理想』533号,1986:PP.168-176):P.175.

⁹²秋庭裕「真如霊能と霊位向上」(『宗教行動と社会的ネットワーク』大阪大学,1992:P.231-246):P.244.

⁹³ひろたみを『ルポルタージュ 真如苑』知人館,1990:P.57.

⁹⁴秋庭裕「真如霊能と霊位向上」:P.238.

⁹⁵昭和25年8月、教主に譴責された弟子がリンチを受けたとして教主を訴えた事件。マスコミが邪教として大きく取り上げたため教団は一時壊滅的な打撃を受けた。

⁹⁶『真如苑とは』(真如苑アクセスブックシリーズvol.1)真如苑教学部,1992:P.3.

⁹⁷会座の一部は関西の悠音精舎で開かれることがある。

⁹⁸川端「真如苑の発展と霊能者」(『宗教行動と社会的ネットワーク』大阪大学,1992:PP.210-230):P.215.

⁹⁹W. イーザー(榎田収訳)『行為としての読書』岩波書店,1982:P.34.

¹⁰⁰『行為としての読書』:P.289.

¹⁰¹『行為としての読書』:P.35.

¹⁰²『行為としての読書』:P.284.

¹⁰³『行為としての読書』:P.287.

¹⁰⁴『行為としての読書』:P.271.

¹⁰⁵『行為としての読書』:P.273.

¹⁰⁶『行為としての読書』:P.274.

¹⁰⁷『行為としての読書』:P.277.

¹⁰⁸平成4年に落慶された精舎。真如苑は総合道場の建設を将来の大きな目標の一つに定めており、悠音精舎はその計画の一部をなしている。しかし総合道場の最終的な姿についてはまだ模索中であるという。

¹⁰⁹『内外時報』No.500真如苑教学部,1993.4月:P.7.

¹¹⁰『歓喜世界』No.172真如苑編集部,1992.5月:P.7.

¹¹¹『さくらの道:真如苑青年部弁論大会弁論集 第26回、第27回』真如苑青年部,1994:P.43.要約。

¹¹²『歓喜世界』No.178,1993.11月:P.17.

¹¹³『歓喜世界』No.170,1991.10月:P.25.